

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 15 日現在

機関番号：24302

研究種目：基盤研究（c）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520503

研究課題名（和文）英語綴り字改革運動の文化社会史的研究

研究課題名（英文）A study of the socio-cultural history of the spelling reform of English

研究代表者山口美知代

京都府立大学・文学部・准教授

研究者番号：50259420

研究成果の概要（和文）：

19～20 世紀の英語綴り字改革運動について、個別の事例をとりあげながら根幹にあった言語規範意識、功利的言語イデオロギーを明らかにした。一方で、多様化する世界諸英語の時代の多様化する英語音声特徴を明らかにし、また、表音式綴り字以外の音声表記システムの可能性について考察を深めた。それによって、19～20 世紀（特に 1870 年代から 1940 年代）に綴り字改革論者たちのあいだで理想視されていた表音式綴り字が当時の文化社会的時代背景を反映したものであったことを示した。

研究成果の概要（英文）：

This study revealed the prescriptive and utilitarian linguistic ideology observed widely among the 19th and 20th century spelling reformers of English. It also investigated the phonetic characteristics of varieties of English, known as World Englishes, and discussed other possibilities of efficient sound-to-letter transcription, including shorthand and speech recognition. This has led to the conclusion that the 19th and 20th century spelling reformers' idealistic view on phonetic spelling reflected the socio-cultural situation they were in.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：英語学史

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：正書法、綴り字改革、表音式綴り字、言語規範、読み書き教育、音声学史、音声表記

1. 研究開始当初の背景

申請者は、2002 年以来、文献調査・イギリ

スでの資料調査に基づいて英語綴り字改革運動の文化社会史的研究を進め、2009 年春、その成果を『英語の改良を夢みたイギリス人

たち—綴り字改革運動史 1834—1975』(開拓社刊)として刊行した(以後、山口(2009)と記す)。その研究は、英語圏においても研究のなされていない資料に基づいたものであったが、公刊媒体が日本語であったことから、広く国際的に学界に問うことの必要性を感じた。このような背景のもとで本研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究では、山口(2009)で公刊した研究をさらに継続して発展させること、その内容を英語で発表、発信し、英語学・英語学史研究、英語教育・英語学習に資することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、山口(2009)を発展させ、英語で発表するために、特に初年度(2010年度)は関連学会・研究会で口頭発表を行い、隣接分野の人々と意見交換、議論をしながら論を深めた。これが学会発表③、④、⑤、⑥である。

研究を進めていくうちに、綴り字改革と密接につながっており、山口(2009)でも扱った表音式速記について、より深く研究する必要性が明らかになってきた。そこで、申請当時研究協力者として加わってもらっていた兼子次生氏(日本速記協会理事長)とともに、速記・言語科学研究会を設立し、速記及び綴り字改革に関する研究を進めていくことになった。この研究会参加者は、本研究申請時には連携研究者として加わっていないが、実質的に、本研究遂行において大きな役割を担った。年に一回の研究発表会を開き、そこで研究成果を発表したものが、学会発表④、⑤、⑥である。また、この研究会の活動を、2013年3月に『速記・言語科学研究会活動報告書 2010.4-2013.3』として公刊することとし、そのために議論を重ねた。

山口(2009)で萌芽的に扱っていた、世界の英語の多様性と英語発音の多様性、そして綴り字及び綴り字改革運動との関連についても、フィールドワーク、文献資料調査を行った。学会発表①や、図書①である。

また、音声と綴りの問題について、音声表記についての理解を深め、海外の研究者と交流するために、研究代表者は2010年8月と2011年8月にロンドン大学ユニヴァーシティカレッジで開かれた夏期音声学セミナーに参加した。(この様子は、研究ノートとして京都大学英文学会発行『ALBION』復刊56号、2010年11月刊 pp.129-135に「ロンドン大学夏期音声学セミナーとトランスクリプション」として発表している)

本研究遂行において、研究内容を広く公開

するため、また、海外の研究成果を取り入れて研究を進めるために、ゲストスピーカーを招いての講演会を三回京都府立大学で開催した。いずれも英語の音声学的多様性について綴りとのかかわりを踏まえながら論じたものである。2011年11月9日に、ロンドン大学ユニヴァーシティカレッジ名誉教授ジョン・ウェルズ博士の講演会「英語の方言・訛り」を開催した。2012年5月25日にノーサンブリア大学上級講師ロバートマッケンジー博士を招いて「多様な英語に対する日本人大学生の意識」という論題の講演会を開いた。2012年11月8日に音声学ジェフ・リンジー博士を招いて「英語の発音を学生、教師、俳優に教えること」という講演会を開いた。

4. 研究成果

本研究の成果は、(1)研究代表者が山口(2009)の内容を発展させ英語で発表した論文と、(2)研究代表者が中心的に活動した速記・言語科学研究会による研究成果との二点に大きく分けることができる。

まず第一に、山口(2009)の内容を発展させて英文で発表するということがこの研究の主たる目的であり、その成果としては論文①、②、③がある。論文①は、学会発表⑥をもとにしたもので、連携研究者米倉綽教授の英語史の観点からの綴り字改革についての先行研究との関連を明示しながら論を進めた。イギリス言語学会(Philological Society)の綴り字改革運動が、表音式綴り字の有用性への信念だけでなく、19世紀後半に盛んになった言語の歴史的研究から得た知見を背景としていたことを述べた。また、言語学会が学会として綴り字改革に取り組んだ格好になっているが、実は、少数の熱心な改革論者が言語学会や技芸協会など複数の学術団体に所属して団体としての主張にしていたことを、文化社会史的に近年明らかにされてきた任意団体(アソシエーション)の活動という視点から解き明かした。

論文②は、連携研究者豊田昌倫教授主宰の現代英語談話会で口頭発表をし、議論をしたものをもとに、論文集『現代英語談話会論集』に発表した。山口(2009)の第2章で取り上げた19世紀後半のロンドン学務委員会の綴り字改革運動、読み書き教育、発音教育について、新たな資料を用いて分析したものである。ロンドン学務委員会管轄の小学校を舞台としたスケッチ集に描かれたコックニー方言の分析を行うとともに、19世紀末の公立小学校を論じる際に優勢であった言語規範、言語イデオロギーについて論じた。これが綴り字改革運動の根底にある言語イデオロギーに通じるものでもある。

論文③は、山口(2009)で取り上げたアイ

ルランドの劇作家バーナード・ショーの綴り字改革及び表音式速記について、ショー研究の専門家の学会である日本バーナード・ショー協会が発表した学会発表⑤及び、学会発表②をもとに論じたものである。バーナード・ショーのアルファベット改革は、表音式速記を念頭において提案されたものであり、通常のローマン・アルファベットに比べると、速記的要素が取り入れられていることを具体的に論じた。

なお、速記・言語科学研究会の2010年度研究会及び、日本バーナードショー協会の2012年度春季大会は、研究代表者の所属機関である京都府立大学で開催した。これにより、本研究と関連の深い研究会の研究活動の促進に貢献した。なお、京都府立大学で本研究を進めるにあたっては、京都府立大学における連携研究者の菅山謙正教授（当時）及び川分圭子教授と日常的な意見交換、議論を行ったことが有用であった。

次に第二の成果を述べる。それは2013年3月に公刊した『速記・言語科学研究会活動報告書 2010.4-2013.3』が、本研究の中核的報告書である。これは英語綴り字改革の根本原理である表音システムの探究と深くつながる音声表記の問題を、学際的に研究した。論文①から⑩がこれにあたる。②～⑥では速記研究者、日本速記協会理事長兼子次生氏が速記の原理を論じた。⑦～⑧では河原達也京都大学工学部教授が、自動音声認識技術について論じた論考である。⑨は下谷正弘福井県立大学学長が日本語の音声表記について速記者及び日本語研究の立場から論じている。⑩は井上美弥子スタンフォード大学准教授が人類学の立場から近代日本の速記及び初期体系について論じている。

最後に、図書『世界の英語を映画で学ぶ』（松柏社）も本研究の成果の一部であることを述べる。イギリス、アメリカ、アイルランド、オーストラリア、南アフリカ、インド、シンガポールの英語を扱った本書において、編著者である研究代表者は各英語の概要（歴史・現状・音声・文法・語彙・綴り）を記し、また、オーストラリア英語、インド英語、シンガポール英語についての章を執筆した。その際に、綴りの違い及び発音の違いについて、特に後者について丁寧に取り上げている。これは本研究を遂行するなかで行った調査、分析、得た知見を活用したものである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計13件）

- ① 山口美知代、The Philological Society's Partial Corections of

English Spellings、『速記・言語科学研究会活動報告書 2010.4-2013.3』、査読無、2013、77-88

- ② 兼子次生、「英国ピットマン式速記法が日本へ与えた影響」、『速記・言語科学研究会活動報告書 2010.4-2013.3』、査読無、2013、6-18

- ③ 兼子次生、「速記の原理 オルソグラフィズム フォネティシズム シンボリズム」、『速記・言語科学研究会活動報告書 2010.4-2013.3』、査読無、2013、19-33.

- ④ 兼子次生、「速記という文化」、『速記・言語科学研究会活動報告書 2010.4-2013.3』、査読無、2013、34-40

- ⑤ 兼子次生、「速記誕生初期の符号を考える」、『速記・言語科学研究会活動報告書 2010.4-2013.3』、査読無、2013、41-44

- ⑥ 兼子次生、「岩手に速記の源流を探る～田中館愛橘の啓示と先達田鎖綱紀の活躍」、『速記・言語科学研究会活動報告書 2010.4-2013.3』、査読無、2013、45-56

- ⑦ 河原達也、「自動音声認識技術の到達点と展望」、『速記・言語科学研究会活動報告書 2010.4-2013.3』、査読無、2013、57-60

- ⑧ 河原達也、「話し言葉の音声認識の進展—議会の会議録作成から講演・講義の字幕付与へ」、『速記・言語科学研究会活動報告書 2010.4-2013.3』、査読無、2013、61-68

- ⑨ 下谷政弘、「速記術における漢字音と日本語表記」、『速記・言語科学研究会活動報告書 2010.4-2013.3』、査読無、2013、69-70

- ⑩ Miyako Inoue, Stenography and the Linguistic Experience of the Modern in Late Nineteenth and Early Twentieth Century Japan、『速記・言語科学研究会活動報告書 2010.4-2013.3』、査読無、2013、71-74

- ⑪ 山口美知代、「森有礼へのホイットニーの返信とアメリカの綴り字改革論」、『コロスコピア』、査読有、第21号、2011、1-18.

- ⑫ 山口美知代、“Correcting Cockneys: Charles Morley's Studies in Board Schools”、『現代英語談話会論集』、査読有、第6号、2011、69-86.

- ⑬ 山口美知代、“The Shaw Alphabet and Shorthand”、『バーナード・ショー研究』、査読有、第12号、2011、53-66.

〔学会発表〕（計6件）

- ① 山口美知代、「シンガポール議会の記録」、速記・言語科学研究会、2012年9月2日、名古屋市公会堂

- ② 山口美知代、「バーナード・ショーと速記」、速記・言語科学研究会、2011年9月4日、福

井県立大学

なし ()

③山口美知代、「アイザック・ピットマン～速記と綴り字改革運動～」、速記・言語科学研究会、2010年9月5日、京都府立大学

④山口美知代、「19、20世紀イギリスの綴り字改革運動—文化・社会的背景と言語観」、第27回多言語社会研究会、2010年6月26日、東京大学

⑤山口美知代、「『ジョージ・バーナード・ショーの言語論』とイギリスの綴り字改革運動」、日本バーナード・ショー協会2010年春季大会、2010年6月5日、実践女子大学

⑥山口美知代、「綴り字改革運動を支持した19世紀の言語学者たち」、近代英語協会第27回大会、2010年5月28日、京都大学

〔図書〕(計1件)

①山口美知代編著、松柏社、『世界の英語を映画で学ぶ』、2013、177

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山口 美知代 (YAMAGUCHI MICHIO)

京都府立大学・文学部・准教授

研究者番号：50259420

(2) 研究分担者